

フランシスコ会の福音化するミッション

フランシスコ会 村上芳隆 ofm

1. フランシスコといえ

フランシスコといえ、多くの日本人にとって、フランシスコ・ザビエルのことかもしれません。あるいは、現教皇フランシスコでしょうか。フランシスコ会は、この二人の有名人の名前の由来であるアシジの聖フランシスコ（1182-1226）によって、1209年に創立された修道会です。

フランシスコ会の日本での活動はキリシタン時代（16世紀）に始まりますが、266聖殉教者から始まる迫害によって途絶しました。1907年に再来日し、札幌に最初の共同体を置いて宣教活動を再開しました。現在、8つの教区（札幌、さいたま、東京、横浜、新潟、名古屋、大阪、長崎）に13の共同体があり、会員は90名ほどいます。小教区と幼稚園を主な場として宣教司牧に励んでいます。

2. 正式名称

フランシスコ会という名称は通称であり、正式名称は「小さき兄弟会」（Ordo Fratrum Minorum）です（ちなみに、「フランシスコ」は、誕生の時不在だった父親が後日改名させた名で、洗礼名はジョバンニ・ベルナルドネ）。修道会としては私たちの他に、聖フランシスコの裁可された同じ会則（1223年）に従う他の修道会、コンベツアル会とカプチン会（いずれも通称）があります。

3. 会則と会憲に表現されている修道会のカリスマ

聖フランシスコの裁可された会則は、「小さき兄弟たちの会則と生活はこれである。つまり、わたしたちの主イエス・キリストの聖福音を遵守し、従順のうちに、何も自分のものとせず、貞潔に生きることである」で始まります。聖福音が会則であり、私たちは誓願を通してそれを遵守する生活共同体なのです。

会憲第一条には、会の特徴が簡潔に表現されています。

（1）**小さき兄弟会は、アシジの聖フランシスコによって創立された兄弟共同体である。**ここにおいて兄弟たちは、聖フランシスコが守り、かつ示した生活様式に従って、教会の導きのもとに福音を生き、聖霊の働くままに、イエス・キリストにより忠実に付き従い、誓願を立てることによって、最も愛すべき神に自分をあますところなくささげる。

（2）聖フランシスコの弟子である兄弟たちは、祈りと信心の精神をもって、根本から福音的な生活を営まなければならない。そして兄弟的交わりのなかで、悔い改めのあかしと、小さき者であることのアカシを立てる。また兄弟たちは、すべての人に対する愛のゆえに、全世界に福音を告げ知らせ、和解と平和と正義を、行ないをもって説き、被造物に対する大きな敬意を示さなければならない。

4. フラテルニタス（フラテルニティ）

会憲に、小さき兄弟会は「兄弟共同体」である、という定義が出てきます。原文では「フラテルニタス」、英語訳では「フラテルニティ」です。この言葉には豊かな意味があり、様々に翻訳されています。例えばフランシスコ教皇の使徒的勸告「福音の喜び」の中では『兄弟愛』、在世フランシスコ会では集会単位として『兄弟会』、抽象的な意味合いで『兄弟性』などです。フランシスコ会の中では一般に「兄弟共同体」、「兄弟性」と訳しています。しかし、「フラテルニタス」の訳語を少し考え直す必要があると最近思うようになりました。

5. フラテルニティ・イン・ミッションという自己理解

現在のフランシスコ会は、フラテルニタスである小さき兄弟会の自己理解を次のように表現しています。

激しく変動する世界にあつて、わたしたち**小さき兄弟会**は、人にかかわる兄弟としての私たちのアイデンティティを、「派遣されて宣教する使命を帯びた観想的で巡業する**兄弟共同体**」（Fraternity-in-Mission）として表したい。（2001年OFM総評議会総括文書）

すなわち、**小さき兄弟会**は、観想的（Contemplative）で、旅する者として巡業しながら（Itinerant）、『派遣・宣教・使命』を生きる（In Mission）**兄弟共同体**（Fraternity）なのです。この表明をよく理解するために、最近ではフラテルニタスを「兄弟的交わりの生活／交わりの場」という説明的訳を使うこ

とがあります。

第2バチカン公会議後の会憲改定プロセスにおいて、40年以上前に次のように表明していました。

この兄弟共同体は、聖霊の導きのもとに、社会的、文化的にそれぞれ異なった環境からやってきて、真の友情と尊敬の絆を作り、互いに受け入れようと努力している人々の集まりであって、単なる仕事団体でもなければ、使徒職遂行団体ですらありません。この共同体においては、会員はみな兄弟であり、それぞれ異なってはいても、平等で自由な人間として共同責任を有しています。(1973年マドリッド総集会総括文書)

「生き方(生活)によるあかし」がカギです。一人ではなく、フラテルニタスによるあかしです。つまり、福音を生きる兄弟共同体の生活そのもの(兄弟的交わり)が、あかしだからです。それを会憲は、福音宣教の第一の形であると述べています。具体的な使徒職、司牧活動による明白な宣言は、それを土台としたもう一つの方法(形)なのです(会憲第八九条)。

6. 歴史の中での位置づけ

このようなあかしの形を理解するのに、ジェラルド・アーバックルによる修道生活の共同体モデル論は参考になります。要約すると以下のようになります。

- ① 砂漠の隠者 … 聖アントニオ(四世紀)
- ② 修徳的共同体/修徳定住モデル(個人から共同生活へ) … ベネディクト会(5世紀)
- ③ 機動的な関係モデル(托鉢修道会) … フランシスコ会(13世紀)
- ④ 使徒職モデル(必ずしも共同生活を前提しない活動会) … イエズス会(16世紀)
- ⑤ リベラルモデル、自己実現モデル、癒しモデル… 第二バチカン公会議後に出てきた。
- ⑥ 再創立モデル… 創立のカリスマを現代に生きる。

機動的な関係モデルの特徴は、第一に共同体としての福音的関わり合いによって、それを通して福音化(宣教)することである。共同体の責任者は、メンバー同士の対話と交流のコーディネーター、ファシリテーター(促進者)の役割を担っている。(Arbuckle 1993年)

フランシスコ会は13世紀にあって全く新しいスタイルとして誕生した修道会の一つです。定住生活ではなく、必要に応じてどこにでも出かけることの出来るのが特徴です。教会はドミニコ会等の新しい修道会と共にフランシスコ会を全教会の刷新のために用いました。フランシスコは兄弟たちをフラテルニタスとして(少なくとも二人ずつ)派遣しています。伝統的修道院のような自給自足な定住生活スタイルではありませんが、私たちは共同体の生活を前提としています。フランシスコは建物ではなく、世界そのものを「修道院(cloister)」とみなしています(サクルム・コンメルチウム参照)。

関係モデルを土台とした福音宣教の在り方を、未裁可会則と会憲は以下のように表現しています。

未裁可会則第16章(1221年)

ところで、そこ(非キリスト教徒のもと)へ行く兄弟たちは、二つの方法をもって、彼らの間で霊的に生活することができる。一つの方法は、口論や争いをせず、「神のためにすべての人に従い」、自分はキリスト者だと宣言することである。もう一つの方法は、主の御心にかなうと判断するなら、神の御言葉を宣べ伝えて、全能の神・父と子と聖霊・万物の創り主を信じ、贖い主、救い主である御子を信じるように、そして洗礼を受けてキリスト者になるようにと、勧めることである。

会憲第87条

- (1) 兄弟会全体は、すなわち会も、管区も、修道院も、またすべての兄弟も、自分たちのためにのみ生きるのではなく、他者のために益をもたらすものでなければならない。兄弟たちは、自分たちの間で営むその同じ兄弟的交わりを、すべての人に及ぼすことを求める。
- (2) 祈りと悔い改めの業に基づくこのような兄弟的交わりは、福音への第一にして、優れて明らかなあかしであり、新しい人間家族の預言者的しるしである。人々の中での兄弟たちのふるまいは、彼らを見たり聞いたりする人がみな、天の御父を称め賛えるほどになるはずである。

しかし、日本でのフランシスコ会の宣教の歴史を振り返ってみると、フランシスコ会の兄弟たちは意識していたかどうか分かりませんが、イエズス会的な「使徒職モデル」の共同体の在り方と宣教方法を次第に用いるようになっていったように思います。

7. 直面しているチャレンジ

私たちが担当している幾つかの地区と小教区での司牧経験をもとに、本来のカリスマに立ち戻った発想で、宣教司牧委員会が「宣教基礎論」をまとめ、2015年2月に公開しました。それは、私たちが試み実践した経験を、現代の三位一体論とフラテルニタス理解をもとに展開させて考察したものです。「派遣されて宣教する使命を帯びた観想的で巡業する兄弟共同体」(Fraternity-in-Mission)を核(土台)としてそれに形を与え、広げ、創造していくダイナミックな動きとして福音宣教を捉えます。

私たちはその動きを、病気や高齢の兄弟と共に住むフラテルニタスを造り、広域を担当するフラテルニタスの在り方を刷新して、共同宣教司牧体制を信徒や他の協力者とともに造り上げていく(フラテルニタスの拡がり)、信徒ともに教皇フランシスコが呼びかけている「新しい福音宣教」(福音の喜び14)に応えられるフラテルニタスになっていくものとして描いてみました。

とはいえ、現実の困難な問題と課題に対処することに忙殺され、その問題処理の方法として共同宣教司牧体制の確立、フラテルニタス造りをしているという印象を、周囲の人々に与えてしまいました。これからの福音宣教を新しくして推し進めるためには、「問題処理型」の組織的発想から「未来創造型」の発想への転換が必要だと痛感しています。それは、宣教司牧委員会の兄弟たちが各フラテルニタスを訪問して、兄弟たちと信徒の皆さんとも話し合いを持ちましたが、新しい方針を必ずしも好意を持って受け入れてもらえなかったことがあったからです。そんな時、「学習する組織」の提唱者であるピーター・センゲの言葉に出会いました。

「創造すること」と「問題を解決すること」の根本的な違いは簡単である。問題を解決する場合、私たちは望んでいないことを取り除こうとする。一方、創造する場合は、本当に大切にしていることを存在させようとする。これ以上に根本的な違いはほとんどない。もちろん多くの人は、仕事でも私生活でも、真に大切なことを創造することに力を注ぐより、問題解決とさまざまな状況への対応にはるかに多くの時間を費やす。実際、私たちは問題への対応で頭がいっぱいで、「自分が本当は何を望んでいるか」ということはすぐにどこかへ行ってしまう。組織は、日々の問題を解決することと新たな結果を生み出すことの両方を実行しなくてはならない。だが個人としても組織としても、新しい有意義な何かを創り出すことではなく、問題を解決することを仕事の中心に据えた場合、目的意識を持ち続けるのはむずかしい。深い目的意識がなければ、困難な時代に力強く成長するために欠かせないエネルギーや情熱、献身、粘り強さを発揮することは至難の業である。(センゲ2003年)

それはピーター・センゲ氏の「存在させようとする」という言葉に集約されているものと思われます。単なるお飾りとして(ビジョンや理念を)掲げるのではなく、コンパスの芯のように常に中心に据えられ、どんな大きさの円が描かれようと、その中心が揺らぐことのないものとして存在し、常にそこに立ち戻るサイクルが生じているのだとしたら、それこそが「存在させようとする」作用であるといえます。(中土井2014年)

私たちは、人口が減少し近い将来に消えてしまうかも知れない、地方の小さく脆弱な教会の問題を如何に処理していくのか、という方針で動いているような印象を与えてしまったようです。つまり、望んでいない結末を避けるために望んでいないことを取り除こうと必死に動いているように見られたのです。しかし、私たちが本当に大切にしていることは、いただいた信仰の恵みに感謝しながら生活し、「福音の喜び」を分かち合い、伝え、あかし続ける信仰共同体を存在させ、サポートしようとする動きであったはずで

8. 養成の大切さ

私たちが「本当に大切にしていることを存在させようとする」ために必要なことは、生涯養成です。会のカリスマをより良く理解し、生きることを促進するプログラムが欠かせません。数年前から「派遣のプログラム」というものを生涯養成の一環として実施するようになりました。これは宣教司牧委員会と養成委員会が合同で提案し、試行錯誤しながら実施してきたプログラムです。人事異動があったときに、

各フラテルニタスで新しいメンバーと古いメンバーとが、改めて共同体の生活とミッションを見直し評価して新しくしていくプログラムとして実施しました。今後は人事異動がなくても、定期的に見直しと刷新のプログラムとして実施していきたいものです。

このプログラムは、「フラテルニタスとしての生活とミッションのプロジェクト」という名前で、実は1990年代に各管区でやるように総本部の指導を受けていました。しかし、自分たちの現状に合わせて計画し実施出来るようになったのは、つい最近のことです。こういう作業は面倒くさいと感じる人たちもいるようですが、フラテルニタスとして、また管区として、つまり共同体（組織）として「本当に大切にしていることを存在させようとする」共有ビジョンを持ち、実現していくためには欠かせないものです。生涯養成を充実させることによって、新しい入会者、有期誓願者のための初期養成プログラムや目標がより明確になってきます。

9. これから私たちは

私たちは2007年に日本再宣教100周年を、また管区設立30周年を同時に祝いました。管区設立までの70年間は、それぞれの地域で母管区から派遣されたフランシスコたちが、それぞれ教区と契約を結び、独自に福音宣教をしていました。第二バチカン公会議（1961－65年）の頃には、12の独立した宗教法人格を持った分管区（宣教地区）があり、260名を超えるフランシスコ会の兄弟たちがいました。公会議後、ローマにあるフランシスコ会の総本部は、私たちが一つの管区となって日本の福音宣教に貢献するよう指導しました。12年後の1977年に日本聖殉教者管区が設立され、一つの管区となりました。しかし、名実ともに一つの管区として機能しはじめたのは、2000年代に入ってからです。

2017年は日本のフランシスコ会が一つの管区になって40年になります。ご存知のように40という数字には聖書的な意味合いがあります。イスラエルの民がエジプトの国を出て、約束の地に入るのに40年の旅が必要でした。イエスさまは宣教活動を始める前に40日の断食と祈りの時を持ちました。ひとつの管区となって40年の経験を持ったわたしたちは、日本での福音宣教のために管区として新しい在り方をしていく様に招かれていると考えています。管区の中核で責任ある奉仕職についている兄弟たちの多くは、管区設立後に入会してきた人たちです。新しい世代の兄弟たちが、管区長をはじめ管区の全責任を担うようになった時、一人前の管区になれるのかも知れません。

フランシスコ会は2015年5月、アジジで総集会を開きました。テーマは「現代において兄弟であること、より小さい者としてあること」でした。修道会の名前（アイデンティティ）を主題にしたわけです。全ての被造物の兄弟となっていくこと、兄弟関係を創り広げていくこと、「より小さい者」としてその関係に奉仕していくことがテーマでした。会のカリスマの原点に立ち帰り、新たに生き直し、歩み続けることを再確認する総集会でした。私たちは修道会のカリスマに添った本来の奉仕のし方で、日本社会の福音化に貢献したいと願っています。そして、この歩みに共感する新しい「兄弟たちを主が与えてくださる」（フランシスコの遺言）と、私たちは信じています。

2017年12月23日

参考文献

- (1) Gerald Arbuckle, "Refounding the Church", Orbis, 1993, p160 以下を参照。
- (2) 「フランシスコ会日本管区宣教基礎論」2015年。
[http://www.ofm-j.or.jp/doc/EconomyOfTrinity&FraternityInMission2015\(A5\)02.pdf](http://www.ofm-j.or.jp/doc/EconomyOfTrinity&FraternityInMission2015(A5)02.pdf)
- (3) サクルム・コンメルチウム (The Sacred Exchange between Saint Francis and Lady Poverty)
<http://franciscantradition.org:8080/FAED/index.jsp?p=529&workNum=42>
- (4) SoL (組織学習協会) の機関紙『Reflections』Volume 5, Number 1. 2003年, "Creating Desired Futures in a Global Economy" By Peter M. Senge. 日本語版、「グローバル経済において望ましい未来を創り出す (2)」<http://change-agent.jp/news/archives/000166.html>
- (5) 中土井僚「人と組織の問題を劇的に解決する U 理論入門」PHP 研究所、2014年。
- (6) ピーター・M・センゲ「学習する組織」英治出版、2011年。小田理一郎「『学習する組織』入門——自分・チーム・会社が変わる 持続的成長の技術と実践」英治出版(2017/6/21)。高間邦男「学習する組織 現場に変化のタネをまく」光文社新書 (2005/5/17)

「福音宣教」誌 2015年10月号：“奉献生活への招き —フランシスコ会” に加筆。